

小学校教育との円滑な接続を

目指した幼児教育の在り方

—幼小の連携を通して—

天理市立丹波市幼稚園 教諭 酒本 智香

Sakemoto Toshika

要 旨

幼稚園教育要領および小学校学習指導要領の改訂により、幼児教育と小学校教育の円滑な接続に向けた取組を推進することがこれまで以上に求められている。そこで、幼稚園と小学校の連携を図っていく上で、子ども同士の交流、指導者の相互理解、家庭・地域との連携をどのようにすればよいのか、連携の在り方について研究を進めた。

キーワード： 交流、連携、互惠性、相互理解、協同的な学び

1 はじめに

本園と丹波市小学校とは、いわゆる小1プロブレムといわれている実態や保護者の就学に対する不安を和らげるため、指導者が互いに出向いて出前保育や出前授業を行ったり、子ども同士の交流を行ったりなど、10年前から交流している。今回の幼稚園教育要領および小学校学習指導要領の改訂を受けて、これまでの連携の在り方を見直し、幼児期から児童期へと滑らかにつないでいくためのよりよい幼小連携の在り方を探っていきたい。

2 研究目的

幼小の交流、連携を通して、園生活から就学への滑らかな接続のための幼児教育、連携の在り方について研究する。

3 研究方法

幼児教育から小学校教育への滑らかな接続を考えると、互いに連携することが必要不可欠である。そこで、研究の視点を次のように設定し、実践を通して探っていった。

- (1) 子ども同士の交流について、計画の立案と実施、評価と反省を行い、互いに互惠性のあるものにしていく。
- (2) 指導者の相互理解を深めるために、幼稚園と小学校の教員が連携を密にし、子どもについての情報交換、出前保育、合同授業を行う。
- (3) 接続期のカリキュラムの連携を通して、卒園までに育てたい力を考え、保育の在り方を工夫したり、幼稚園教育の学びを小学校教育につないだりする。

- (4) 家庭・地域と連携し、入学に対する不安感を解消したり、小学校生活に向けた子どもの生活を考えたりできる場や情報を提供する。

4 研究内容

(1) 視点の捉え

ア 子ども同士の交流

年間の交流計画を立案し、幼小互いの年間計画に位置付け、継続的、計画的に交流をする。その中で、交流ごとに指導者の事前打合せを行い、子どもの姿を出し合い、ねらいや内容の検討、指導案の作成を行う。また、幼小の子どもたちにとって、互いに価値ある交流(互惠性のある交流)となるようにし、交流の場だけでなく、その事前事後の活動を大切にし、一つの交流によって、心をつなぎ、次回への期待をもたせるものになるよう指導者間で共通理解を進めていく。交流の後には指導者間で話し合いを行い、ねらいが達成できたか、交流の中で子ども同士のどのような姿がみられたか、互惠性のある活動内容であったかなど、具体的な姿を出し合い、反省、評価を行い、次回へとつなげていくことが大切であると考え。

イ 指導者の相互理解

子ども同士の交流の事前事後の指導者の話し合いを通して、クラスの様子や、特に配慮を必要とする子ども、環境の変化に対応しにくい子どもなど、一人一人の子どもの姿について伝え合い、交流時に適切な援助や支援が互いにできるよう話し合う。また、交流の事前事後の子どもの活動を把握することで、子どもの心をつなぎ、次回の交流にも期待がもてるような言葉がけ等の指導者の援助ができるのではないかと考える。また、幼小合同指導案を作成し、指導者が互いのねらいを把握して合同で授業を進められるようにする。これらの話し合いを進めながら、就学に向けての課題についても話し合うようにし、幼稚園生活で身に付けておくべきことは何かを把握したり、幼稚園教育の中で大切にしていることなどを伝えたりしながら、話し合いを深めていくことが大切であると考え。

ウ 接続期のカリキュラムの連携

交流計画を幼小それぞれの年間計画に位置付けること、幼小合同指導案を作成し、それぞれのねらいを明確化させること、交流の事前事後の話し合いや、互いの指導者が幼稚園や小学校に出向いて、授業をしたり保育をしたりする出前授業や出前保育を通して、教育内容や指導方法を理解していくことが大切であると考え。幼稚園と小学校にある段差を互いの指導者が理解し、その段差を滑らかにして接続するためには、話し合いを積み重ねて、幼小の指導者が互いに学び合う関係をつくり、互いの違いを知ったり、指導の仕方の違いを理解したりすることが大切である。

エ 家庭・地域との連携

園通信「チャイルドチェーン」を交流ごとに作成し、写真やコメントなどで交流の様子を家庭に発信したり、保護者対象にアンケート調査を実施して就学に対する思いや不安を把握したり、家庭との連携を深めていくことで、保護者の就学への不安を少なくできるのではないかと考える。



(2) 実践事例

ア 子ども同士の交流と指導者の相互理解に視点をおいた事例

～6月 カレーパーティーを通して～

以前より、丹波市小学校1年生との交流は、小学校と共に活動の内容を計画し、進めてきた。6月の活動は、子どもたちにとって幼小交流の始まりでもあり、よき出会いをすることで、その後のいろいろな活動も意味のあるものにしたと考えた。当日までのいろいろな活動の過程を大切にし、心をつなぐ交流活動となるよう指導者の相互理解を進めた。

- 〈ねらい〉 幼稚園 ・園でのジャガイモの収穫に感謝し、友達や1年生とカレーパーティーを楽しむ。
- 小学校 ・幼稚園の友達と一緒にカレーを食べたり、一緒に遊んだりして、楽しく交流する。

幼児の活動の様子	考 察
<p>幼児の事前活動</p> <p>ジャガイモ掘り</p> <p>足りない材料は買いに行こう！</p> <p>1年生も呼ぼう！</p> <p>カレーパーティーしたい！</p>  <p>招待状を作って1年生に届けよう！</p> <p>カレーパーティーに来て下さい！</p> <p>必ず行きます。</p> <p>買い物に行こう！</p> <p>カレーパーティーするの。</p> <p>カレーの材料を下さい。</p> <p>おいしいカレーができるといいね。</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1年生の各クラスに招待状を届けることで、知っている子を見つけたり、1年生の担任の先生を知ったりするきっかけになったようである。 ・ パーティーに向けていろいろな準備をする中で、共通意識が芽生え、友達と力を合わせて取り組み、達成感を感じたと思われる。またその経験がさらに次の活動への意欲につながったと考える。

リズム室に飾りを付けよう！

みんなで準備するのは楽しいね。

一緒につなげよう。

カレーパーティー楽しみだね。



交流当日

あの先生、知ってる！

1年生が来てくれた！



このカレー、おいしいな。

おかわりしようよ。



1年生と遊ぶの楽しい！

久しぶりに幼稚園で遊ぶの楽しいな。



カレーパーティー楽しかったね。また会おうね。



・事前の出会いがあったことで、小学校の先生に親しみをもって声をかけていた姿につながったと考える。

・みんなで同じものを食べるという経験は小学校での給食にもつながると考えられる。

・おいしいカレーを友達や小学生と一緒に食べていると、自然に緊張もほぐれていった。そのことが、話をしながら食べたり、食後に園庭に出て一緒に遊んだりする姿につながったと考える。

事後の活動

- ・感想を出し合い、交流を振り返る。

幼稚園 ・おいしかったよ。

- ・なんかいもおかわりした。
- ・ちょっと、ドキドキしたよ。
- ・しってるのが、いたよ。
- ・1ねんせいとあそんだ。たのしかった。
- ・いえでも、かれーのおてつだいをするよ。

小学校…おはなしちょうに記入（自己評価カード）

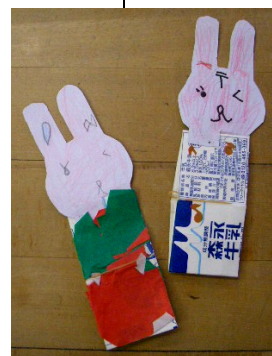
- ・きょう、たんばいちようちえんにいきました。かれーがあまくておいしかったです。ひさしぶりにいきました。
- ・きょう、かれーぱーていーにいきました。いっしょにたべて、こころがあたたかくなって、さいごにおくってくれてうれしかったです。



1年生のおはなしちょう
(自己評価カード)

- ・1年生からプレゼントにもらったぴよんぴよんウサギを使って遊ぶ。
- ・保護者には、園通信「チャイルドチェーン」を通して事前活動から交流までの様子を知らせる。

- ・互いに相手の存在を意識して交流を楽しんだと思われる。そのことより、互惠性が見られた活動であったと考える。



1年生からのプレゼント
「ぴよんぴよんウサギ」

(7) 子ども同士の交流

幼稚園の子どもたちは、はじめは緊張している様子もみられたが、おいしいカレーをみんなと一緒に食べたり、園庭で一緒に遊んだりする中で、小学生に親しみをもってかかわっていた。また、当日までの活動を重視し、幼児の主体性を大切にしながら準備を進めてきたことで、一つ一つの活動が自分たちのものとなり、1年生との交流を楽しみにしながら、当日を迎えることができた。1年生が招待状でお知らせした時間に来てくれたことは、とてもう

れしかったようである。事前活動や交流前の出会い方を工夫することによって、当日の交流をより価値あるものにすることができたと考える。

また、年長者として優しく言葉掛けをしながらかかわっている1年生の姿がみられた幼稚園の子どもが事前に招待状を届けるなど、事前活動を設定することによって、カレーパーティーへの期待もふくらみ、1年生の活動に対する意欲が高まったり、1年生が幼稚園の子どもや先生に親しみをもったりすることができたと思われる。

(イ) 指導者の相互理解

指導者の事前打合わせにおいて、当日の活動の流れを具体的に話し合っておいたことで指導者が活動について共通理解を図ったり、子どもの様子を具体的に把握したりしておくことができた。このことにより、幼小の子どもたちの思いを大切にしたい子ども同士をつなぐ援助を適切に行うことができたと考える。

以上のことから、二つの視点に基づいたカレーパーティーの交流が効果的であったと考える。

イ 接続期のカリキュラムの連携と指導者の相互理解に視点をおいた事例

～幼小合同授業（出前授業）を通して～

子ども同士の交流に重点をおいていたカレーパーティーから更に発展させ、指導者の共通理解とカリキュラムの連携に重点をおいた幼小合同授業を実施した。この合同授業では、幼小合同の指導案を作成したり、指導者が互いの子どもたちの姿や指導方法を知り、理解していくための話し合いを行ったりするなど、交流から連携に深まっていった。

ねらい〈幼稚園〉・1年生に親しみをもってかかわり、出前授業を通して小学校生活への憧れや期待をもつ。

〈小学校〉・年下の友達と共に活動することで、1年生としての自覚や自信、セルフエスティームを高める。

指導者の事前の打合せでは、子ども同士が互いに学び合える活動にするために話し合い、事前の活動を共通理解するとともに、ねらい、内容の検討を進めた。そして、合同の指導案を作成することで、互いのねらいを明確にし、指導者が同じ視点で子どもを見取ったり、援助したりできるようにした。

幼児の活動の様子	考 察
<p>幼児の事前活動 今までの幼小交流を振り返り、次の交流への期待につなげる。</p> <p>交流当日</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年生を迎える。 ・交流の歌を歌う。 ・1年生の群読発表を聞く。  <p>小学校ではあんな勉強するのかな。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・小学生の姿に憧れを感じて見ている姿が見られる。

- ・ 1年生とペアになり、『おもしろ水族館』を作って遊ぶ。



ワッペンつけてあげるね。

今日は1年生と一緒に勉強しましょう！

私の名前が書いてある！



ここに入れるの？

そうそう、その調子！

もってるから大丈夫。



お兄ちゃんすごい！

〇〇くん、やさしいな。

難しい所は、やったるで見ときや。



- ・ 片付けをする。
- ・ 感想を出し合う。

年長児

- ・ 楽しかった
- ・ 1年生と一緒にできてよかった。
- ・ おもしろかった。
- ・ またしたいな。



1年生

- ・ 幼稚園の子と一緒にできて楽しかった。
- ・ 群読とか静かに聴いてくれてうれしかった。

- ・ 1年生を見送る。

事後の活動

幼稚園…交流を振り返り、感想を出し合う。

- ・ 小学生に手作りのワッペンをつけてもらったことで、喜んで活動に取り組もうとする姿が見られた。

- ・ 1年生にやさしくしてもらったり、手伝ってもらったりする心地よさを感じたと思われる。

- ・ 小学生は、相手意識をもってかかわっている姿が見られた。また、普段と違う自分の姿や友達の姿に気付くことができたようである。

- ・ お互いの感想を直接伝え合うことで、楽しかった思いや願いの共有ができたと考える。また、楽しかった経験は、小学校生活への期待にもつながったと考える。

- ・つくるのがたのしかった。
- ・1ねんせいがやさしくおしえてくれた。
- ・べんきょう、おもしろかった。

小学校…おはなしちょうに記入（自己評価カード）

- ・今日の2、3時間目に2組のみんなで丹波市幼稚園にいきました。歌を歌うときにちょっとまちがえたけど、みんなに聞いてもらったからうれしかったです。群読して全部まちがえたけど、おもしろかったです。水族館作りでは、二人で協力して、幼稚園の人の絵がうまかったけど、魔法の水を入れるときにちょっとこぼれました。幼稚園の子と会えてとっても楽しかったです。



1年生のおはなしちょう
（自己評価カード）



チャイルドチェーン（園通信）

- ・園通信「チャイルドチェーン」の発信

(7) 接続期のカリキュラムの連携

幼小合同指導案を立案したことで、互いのねらいが明確となり、幼小の指導者が同じ視点で子どもの姿を見取っていくことができた。交流の内容については、子どもの発達段階に応じた内容と適切な時期を考えることが必要である。合同授業を行った11月の中旬は、1年生にとっては、新しい環境に十分慣れ、自分のこと以外に周りの友達にも目を配れるようになった時期であり、年長児にとっては、友達と同じ目的をもって試行錯誤しながら遊びを進めていける時期である。つまりどちらも協同的な遊びができるようになった時期と考える。この時期に「おもしろ水族館づくり」を取り入れ、年長児と1年生がペアを組んで一つの製作をやり遂げたことで、より交流を深めることができた。同時に、接続期のカリキュラムの連携を共に考える時期として効果的であったと考える。

接続期のカリキュラムを考えていく上で、幼小合同指導案に取り組んだことの効果を幼稚園と小学校のそれぞれの反省から振り返る。幼稚園の幼児は、1年生のアドバイスを得ながら、自分で工夫し製作できる内容を設定することで、幼児が主体的に活動できた。また、1年生の姿に感動し、学校生活に対する憧れや期待感を高めたことやペアになって活動したことで、親しみをもってかかわることができた。さらに、やさしくしてもらふ心地よさを味わえたことや、自信をもって発表する姿にあこがれを感じたことが刺激となり、幼稚園での遊びが広まったり、深まったりした。具体的には、幼稚園での遊びの中で、年

中児や年少児に対して、もっと楽しませてあげたいという思いをふくらませて遊びに誘ったり、楽器遊びや歌など自分たちのがんばっている姿を見せたりしようとする子どもが増えてきた。

小学校では、小学校で見せる姿とは違い、相手意識をもって気配り、心配りをしながらかかわっている姿がみられた。更に、自分や友達が年長児に対して、いつもと違う姿で接している自分自身や友達のよさに気付くことができたことなど、気付きの質を高めることができた。

(イ) 指導者の相互理解

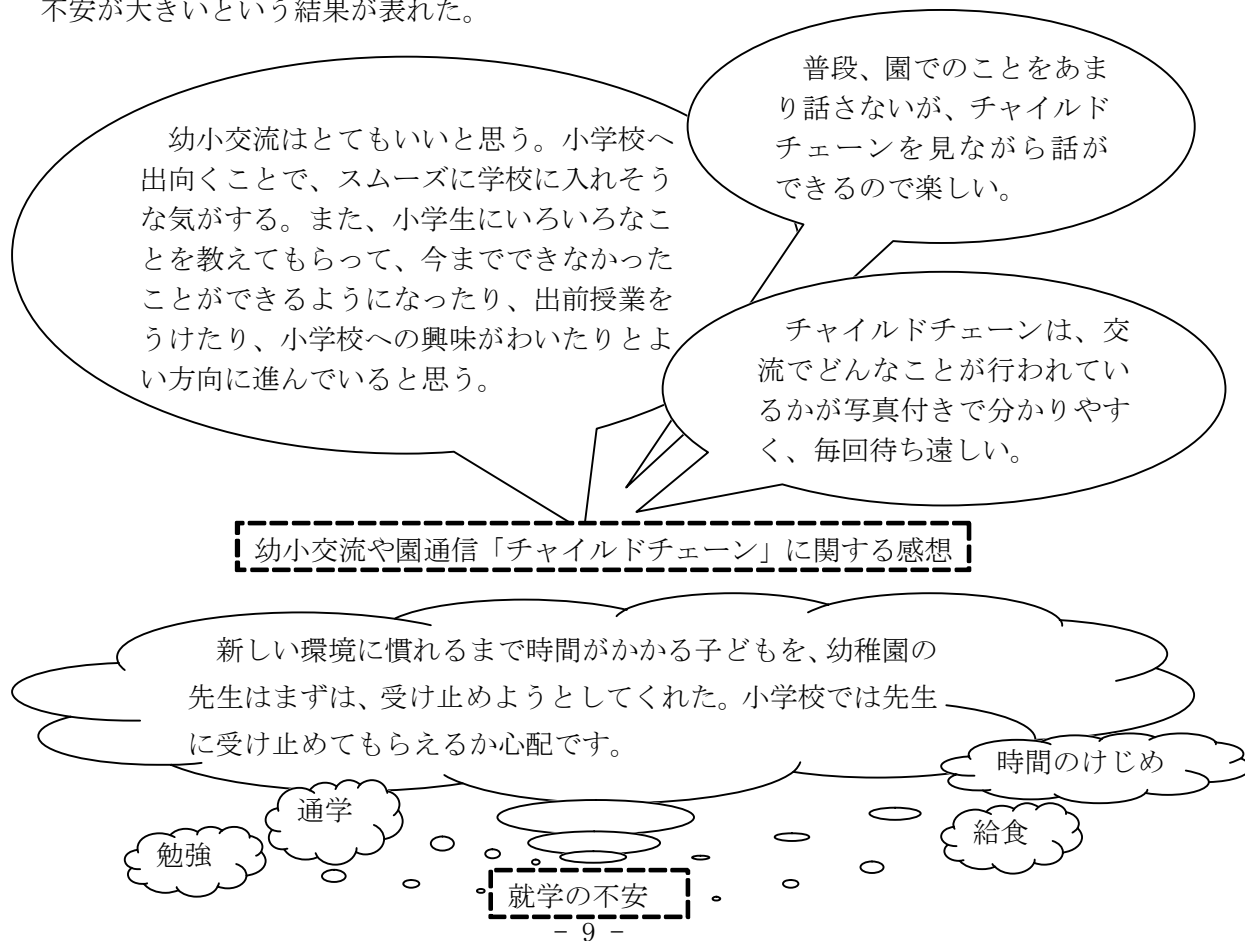
合同授業にむけて、授業形態や指導者の役割分担、子どもの実態とペアの組み方など、具体的に話し合ったことで、指導者同士が連携しながら進めることができた。

以上のことから、二つの視点に沿った幼小合同授業（出前授業）の実践は効果的であったと考える。

ウ 家庭・地域との連携に視点をのこした事例

交流ごとに園通信「チャイルドチェーン」を発行している。幼小連携活動や就学についての保護者の思いを把握するため、チャイルドチェーンを活用して全園児の保護者を対象にアンケート調査を実施した。

アンケート調査は、交流活動についての感想と就学に対する不安、という2点に対し、記述式で行った。回答率をみると、年少 27%、年中 40%、年長 64%というように就学が近い年齢ほど、関心の高さが見られる。また、小学校に兄弟がいる家庭より、いない家庭の方が不安が大きいという結果が表れた。



以上のような結果から、保護者の不安を少なくしていくためにも、子ども同士の交流を深め、様々な機会を捉え、子どもの姿を通して、家庭に幼稚園と小学校の連携の様子を積極的に発信していくことの必要性を感じる。

5 研究結果と考察

(1) 子ども同士の交流

年間計画に位置付け、計画的に継続して行うことで、子どもにとって交流への期待感がよりふくらんだり、小学生を身近に感じたりできるものとなった。また、事前事後の活動を大切にすることで、子どもの思いをつなぐことができ、より価値ある交流へと深めることができた。

(2) 指導者の相互理解

幼小指導者の話し合いを密に行い、互いの指導方法や子どもの姿を共通理解することで、子どもを意図的、計画的に見取り、適切な援助をすることができた。

(3) 接続期のカリキュラムの連携

合同指導案を作成することで、互いのねらいが明確となり、交流に向けて指導者の相互理解がより深まった。今後も合同研修などを通して、互いの指導方法を理解したり、遊びを通じた総合的な学びについて研修を深めたりしながら、滑らかな接続につなげていくことが望まれる。

(4) 家庭・地域との連携

幼小連携の活動の様子を様々な機会をとらえて家庭へ発信することで、保護者の不安を少なくすることにつながってきた。また、アンケート調査の実施により、保護者の就学に対する不安や思いを把握することができた。そして、連携の重要性を改めて実感することができた。

6 おわりに

次年度に向けて、年間計画の見直しや幼小合同指導案の見直しを通して、幼小の指導者がともに子どもを見取っていくための視点や、評価の仕方について、工夫・改善を図っていききたい。また、合同研修会を実施し、学校や幼稚園という組織としての研修の機会をもち、互いの保育や教育を参観し合ったり、幼稚園での遊びを通じた総合的な学びが小学校での教科を中心にした学びにどう生かされるか研修したりして、連携を深めていきたいと考える。

学びをつなぐために、幼稚園ではどのようなことが大切なのか考えたとき、改めて幼児期に必要なことは、保育の基本とされている「心情・意欲・態度」の育成であると考え、5歳児後期での友達との遊びの中で、「一緒に何かをする」「協力してやり遂げる」という協同的な学びの積重ねが、小学校での学習において「一つのことに集中する力」「最後までやりとげる力」につながっていくと考える。今後も保育の充実に向けて努力を重ねていきたい。

参考・引用文献

- (1) 和田信行(2008)『小学1年生「わくわくドキドキ」カリキュラム』学陽書房 pp. 8-16
- (2) 全国国公立幼稚園長会(2008)『幼稚園じほう 11月号』pp. 5-11.